

# 「乾麺の平成」を振り返る

「令和」が幕開けしたのを機に、乾麺業界の「平成を振り返った。平成元年（1989年）から30年後（2018年）の生産量を比べると生産量は約8万t減少。30年間に機械麺が後退し、手延べが伸長。麺の種類別で言えば昭和に比べて機械製うどんが激減し、手延べはギフトから単品重視に移行する。30余年続いた平成とはどんな時代だったのだろうか。乾麺の視点から探ってみた。

## 「平成元年」とは 押し寄せる「構造変化の波」

昭和天皇が崩御した1989年は、世界的に時代の転換期を迎えた年だった。中国で天安門事件が起こり、ドイツではベルリンの壁が崩壊、米国のブッシュ大統領とロシアのゴルバチョフ書記長による会談が行われて冷戦が終結した。日本においては初の消費税や週休2日制が導入。バブル崩壊前の史上最高の株価高騰に社会全体が沸き、働くことが美德とされた時代を反映して栄養ドリンク剤のCMから「24時間タタカエマスク」が流行語となった。また国民的歌手の美空ひばりが死去したのもこの年だった。

このあと世界はグローバル化へと進み、日本は翌平成2年にバブルが崩壊して空前の不景氣を迎える。時代の変わり目だった平成元年は、構造変化の兆しが窺える。それはこの乾麺業界にとっても同

じだったようだ。

## 中食、簡便食の影響じわり

平成元年の乾麺生産量は26万7千342t。前年の昭和63年と比べると1.5%減少した。昭和60年（1

984年）には約30万tあった生産量が、61年〜平成元年の4年間で3万t減少する低落傾向を既に歩んでいた。

平成元年までの10年間の食糧庁の統計によると、曲折を経ながら歩み続けてきたことが分かる。昭和56年の乾麺生産は2.3%増を達成したが、55年と56年は実績を割って26万t台にまで落ち込み、業界も「ついにここまでかとみられた。ところが57年から60年までの4年間は理由がはっきりしないままに上昇線

を描く。60年にはあと一歩で30万tに届くというところまで近づき、他

業界からも注目を浴びたほどだった。この時期は他の小麦粉二次加工品が伸び悩んでいただけに、乾麺の元気がぶりがおおきく目についた。

「生めんや冷凍、即席麺など競合する麺類だけでなく、この年に既に急台頭してきた中食や簡便食品に何かしらの影響を受けている。いわば構造上の問題が業界に押し寄せてきたという危機感がある」（食品関係者に強まる必要がある）（「食品新聞 平成元年4月21日号」と言うのが当時の見解。30年後の令和元年の現在の環境が既に片鱗を覗かせている。

## 手延べの人氣が顕著に

昭和57年以降、乾麺業界を救ってきたのが手延べの成長である。全国に産地が増えたこともあって、日本列島は手延べ列島となりつつあった。当時は過剰生産が問題とされながらも、乾麺業界の生産量を底支えしてきた。

手延べは54年の18.7%増をヤマにそれまでの10年間で実績を割ったのは62年の9.3%減しかない。人氣はギフトから一般市販に移り、勢いを増しながら東日本へ

乾麺生産 平成元年までの歩み (t)

